

## 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が訪問リハビリテーション利用者にも与えた影響

福崎 将平<sup>1)</sup> 中島 崇暁<sup>1)</sup> 腰塚 洋介<sup>2)</sup> 美原 貫<sup>3)</sup> 美原 盤<sup>4)</sup>

1) 公益財団法人脳血管研究所 在宅医療・介護統括局訪問看護ステーショングラウチア  
リハビリテーション部門

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション部

3) 公益財団法人脳血管研究所 在宅医療・介護統括局

4) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[目的] 訪問リハビリテーション(リハ)は、利用者への外出支援による閉じこもり予防や、自主練習を行うなど活動的な生活の獲得を役割としている。しかし、COVID-19の感染拡大により利用者の生活範囲は狭小化し、ADL能力の低下が懸念される。今回、利用者のADLに与えるCOVID-19の影響を調査し、流行下における訪問リハの関わりについて検討した。

[対象] 2019年9月から2020年11月までに訪問リハを利用した外出習慣のある利用75名(男性47名、女性28名、 $67.1 \pm 14.4$ 歳)を対象とした。

[方法] COVID-19流行前後(2019年9月から11月の3ヶ月間を流行前、2020年4月の緊急事態宣言発令を挟んで2020年9月から11月の3ヶ月間を流行後に設定)で、利用者の外出頻度の変化と流行後の自主練習頻度を調査した。流行前後で外出頻度に変化がなかった群(変化なし群)と流行後に減少した群(減少群)に分け、自主練習頻度別の人数割合について比較した。さらに両群について自習練習頻度が週4回以上(以上群)、週3回以下(以下群)、未実施(未実施群)で3群に分類し、各群で流行前のFIM点数と流行後のFIM点数を比較した。統計はカイ二乗検定とWilcoxon符号付順位和検定を用いて有意水準は5%未満とした。

[結果] 流行前後の外出頻度で変化なし群は38名(50.7%)、減少群は37名(49.3%)であった。また変化なし群のうち、以上群21名(55.3%)、以下群11名(28.9%)、未実施群6名(15.8%)であり、減少群では、以上群18名(48.6%)、以下群14名(37.8%)、未実施群5名(13.5%)で両群には有意差を認めなかった( $p=0.72$ )。外出頻度変化なし群について、FIM点数は以上群、以下群、未実施群3群すべてで流行前後の比較による有意差は認めなかった。減少群について、FIM点数は以上群、未実施群では有意差を認めなかったが、以下群は流行前が $97.7 \pm 28.4$ 点であったの対し、流行後が $96.1 \pm 29.3$

点 ( $p < 0.05$ ) であり、流行後に有意な低下を示した。

[考察]訪問リハ利用者においては、外出頻度が減少し、かつ、自主練習が週 3 回以下の頻度になると ADL 能力が低下することが示唆された。外出頻度が減少している利用者に対しては積極的に自主訓練を促し、ADL 能力の維持を図ることが求められる。

[倫理的配慮、説明と同意]インフォームドコンセントを省略する代わりに、当法人ホームページで情報を公開し対象者が拒否できる機会を保障した。本研究は当法人倫理委員会の承認を受けている(受付番号 106-03)。